

第 10 回 子どもの心を知って保育を創る V (4 歳児)
～ おおきくなるのは、たいへん！！ ～



講師 岡村 由紀子 氏

はじめに

4 歳の育ちが小学校・中学校でのいじめなどの問題に大きく関わっています。この時代を知るとともに、どうやって乗り切り、育ちをどのように保障していくのかを今日はみなさんと勉強していきたいと思います。

1 心の発達

- ・自分に対してイライラする。
- ・不安になり涙になりやすい。
- ・乱暴になる。
- ・できるできないにこだわる。
- ・臆病になる。
- ・今までやっていたことが恥ずかしくなってやらなくなる。
- ・いいつけが増える。

4 歳児のこのような姿はどの園でも見られると思います。

事例 1

給食を食べずに泣いている K ちゃん。保育者が「K ちゃん食べないの？」と聞くと、泣きながらうなずく。まわりの子に聞くと、K ちゃんは片付けをしなかったので、「かたづけをしてー」と言ったとのこと。保育者が「K ちゃん、片付けのことを言われちゃったんだね」と言うと、さらに大きな声で泣く。

- ・K ちゃんは「ぼくの気持ちをわかってくれる人がいる」とほっとした（安心感の）中で泣いています。遊びの後は片付けをして給食にするのは園のルールです。「はい、わかりました、片

づけます」と言わないのがこの時代の子どもの心です。遊びに集中し「いや（まだやりたい）」と言うのが、自分の世界を大事にしている心です。遊びたい気持ちを押さえて、（遊びを）続きにするには、自己コントロールが必要です。

事例 2

Y ちゃんが「なかまに入れて」と H ちゃんに言うと、「M くんについて」との返事。保育者が介入し、「H ちゃんが遊んでいるんだから、H ちゃんが答えないとね」と言うと、H ちゃんは「いいたくない きぶん」と素っ気なく答える。「こまったね～」と言って、しばらく間をおくと、H ちゃんが「じゃあいいよ」と答える。

- ・「いいたくない きぶん」と言った後、間があって、「じゃあいいよ」と言うのが 4 歳児の姿です。2 歳児ならすぐに「や～だよ」と答えます。4 歳児はここで言った方がいいのだろうか？と心の中で葛藤し、心が揺れます。そして、最後は自分で結論を出します。この葛藤が自己コントロールの形成につながります。

事例 3

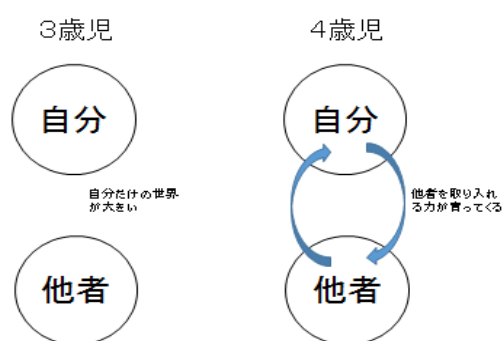
演じる遊びが苦手な Y くんは、友達との遊び（姫を助けるために悪者をやっつける）に珍しくのって遊ぼうとする。2 人の友達と「エイエイオー」（いまからやっつけるぞー）をしていた時、いつも一緒に遊んでいる友達と目が合う。その直後、突然「や～めた」と言って遊びをやめてしまう。

- ・自分の演じているところを、どう思われるかと

考えて、やめてしまいました。Yくんが自分のやりたい気持ちを表現するためには、恥ずかしい気持ちや人からどう思われるかと言う気持ちを乗り越えていく経験が必要です。

3つの事例に共通しているのは、自分だけの世界が大きい3歳児とは違い、4歳児は「なかまの中の自分」が見えるようになってきているということです。この時、大人の言葉で子どもの気持ちを変えさせようとすると、頭でわかっているけど、心や行動が伴わない子どもに育ってきます。最近の保育は、言葉がすごく多いと感じています。保育者は指導している気になるのに、子どもの心に落ちていかない、そんな保育が多くなっている気がします。特に4歳児の保育でよく見られることです。

これは、自己コントロールの構造図です。



3歳児は自分が強く、他者の理解は育っていない状態です。4歳児になると、これまで近所の人に愛想よくしていた子が、母の後ろに隠れてもじもじする姿に見られるように、自分の中に他者を取り込めます。今までは自分の心だけだった世界に他者が入ることで、嵐が起きます。この嵐を乗り越える時に有効なのが、集団の力です。

事例4

早く食べ終わったKちゃんが遊び始めるのを見て、YくんとRくんが、まだ食べ終わっ

ていないのにKちゃんのところに行ってしまう。そこで保育者が「食べたら片づけて遊ぶのが、たんぼぼクラスの子だよ〜」と言うと、にこにこしながらKちゃんとYくんは戻ってくる。「もどってきたKちゃんとYくんはステキだね」と言うと、ひとり遊んでいたRくんが「そうだよ、たべたらかたづけるんだよ」と言う。保育者は「すごい、ステキね。Rくんわかるんだ」と伝えると、満足そうな顔でRくんは戻ってくる。

- この事例では、保育者は子どもが考える言葉かけをしています。「ほら、もどきなさい」では子ども自身で考えることができません。

否定的な言葉でやらせるより、子どもたちにどうしたらいいかを考えさせて、「自律的自己コントロール」をつけさせていきたいです。反対語は「他律的自己コントロール」です。これは、先生の前ではやらないが、陰で悪いことをする、いじめの構造です。では、どういう経験をしたら人をいじめない人になるのでしょうか。そのためには、3歳までに自己主張を丁寧に受け止めてもらう経験が必要です。どの子ども自己主張すれば、友達とけんかになります。その時が他者理解をするチャンスと捉えます。しかし、このチャンスに多いのが「ごめんなさい」を言わせる指導です。ここでは、ごめんなさいを言わせることが目的ではありません。相手が痛い思いや嫌な思いをしているということを示す指導が必要です。指導の最後に「こういう時は、ごめんねって言うんだよ」と伝えるだけでいいのです。

自己主張することと他者を理解するということを通して、子ども自身で結論を出して、自分を律していきます。それは大好きな保育者や友達を通して律していくのです。

自律的な自己コントロールを形成するためには豊かな自己主張が必要です。4歳児は教科書的には「自己コントロールが形成します」と書かれています。でもそんなに簡単には自己コントロール形成はできないと思います。大きくなるのは難しいのです。

園では集団の質が問われます。大人が評価をすれば、子どもはその評価を価値あるものとして捉えてしまいます。でも、プロの保育者は子ども自身に考えさせる保育をしていきます。例えば、4歳児はよく「いいつけ」をします。そこで保育者は「それで?」「どうしたいの?」と投げかけます。子どもは「・・・」となり、「〇くんはだめだと思う。だってね・・・」と自分で答えを出していきます。保育者が子どもに考えさせることによって、他者理解を促していくのです。

2 体の発達

「～しながら～する動き」ができるようになる時期です。運動場のトラックを走るの、まっすぐ走る力と線に沿って走るという2つの力が必要です。4歳児ぐらいになるとトラックを使って走ることができるようになってきます。他にもはさみで円を切ることもできるようになります。片手で紙を回しながら、もう片方で切るという動作を同時にできるようになります。手指の巧緻性が高まってきます。

3 創造性の育ち

見通す力がついてきます。先を見通していく力です。片付けをしたらお昼を食べる、帽子をかぶったら外へ行くなど、経験の中から次の行動がわかるようになってきます。

文字は何のためにあるのでしょうか。記号? 伝えるためのツール? 気持ちを残すもの? ……

文字は人間しか持っていません。伝えたい人と伝えたい事柄があるとき、思いを共有するために文字はあります。ですから前倒しで文字教育をするのは考えなければなりません。オンリーワンの自分のことをわかってもらうために文字があるわけです。その目的を忘れてはならないと思います。わくわくどきどき、伝えたい事柄をいっぱい持つ保育をしていきたいですね。

4 言葉の発達

思考言語が発達して、考える力が付いてきます。時間の流れ(昨日、今日、明日)もわかってきて、「～だから～だ」という見通しも付くようになります。その時、「～しないと～できないよ」という指導がよくありますが、「～したら～できるよ」に変えていくことで、意欲を高めることができます。

5 生活習慣・・・自分で見通しを持つ

朝や帰りの支度などの、個別に言葉をかける場面では、先に答えを言わないで、「今度は何かな?」などと子どもが思考言語をフル稼働させることができるようにします。

食事の際に席を立ってしまう時には、「すわっていないとだめ」と伝えるのではなく、自分の身体と対話ができるように「もう、おなかいっぱいになったの?」などと言葉かけをします。「いっぱい」と答えれば、「今度は何するの?」と問いかけます。「まだ」と答えれば、「食べている時にはどうするの?」と問いかけます。そこから子どもの思考は始まります。

整理整頓では、今までは大雑把にやっていたことを少し丁寧に指導します。お人形などは、雑に置くのではなく、家を作ってベッドに寝かせたり、椅子に座らせたりして片付けとします。こういったところで物を大切にすることを育てたいで

すね。物にはお家があることを教えていきたい年代です。わかりにくければ、写真など、目で見てわかる支援の方法もあります。

6 保育・あそび・友達とたっぷり遊ぶ

ごっこ遊びが主になってきます。ありそうにないことを楽しみます。3歳児と違って、もっとダイナミックになってきます。子ども同士のイメージを共有して、ストーリーは子どものつぶやきから作っていきます。『おおかみと7ひきのこやぎ』では、9ひきのこやぎでも、ねこが出てきても、どんな変化があってもいいのです。園の文化を大事にしながら子どもたちとごっこ遊びを楽しんでください。

ルール遊びでは、ルールを守らせようとすることは、楽しい遊びではありません。数人のやりたい子から始まり、子どもと一緒に遊びを作っていきます。遊んでいくと、「つかれた、タイム」などズルをする子が出てきます。そんなときは、みんなで遊びのルールを作っていきます。ルールを破ろうとする子は、実はその遊びの面白さを感じている子（主人公）なのです。

手先を使って、作って遊ぶ時、指先をしっかり使うことを意識させたいです。のりはスティックのりではなく、指先をしっかり使えるのりがいいです。伸ばしたり、押さえたりといった動きを促します。

7 指導

強い言葉や脅かしでその場をとりつくろうとするのではなく、先生大好き友達大好きの心に支えられながら、子どもが自分自身で自分なりの解決を見つけられるようにすることが大切です。それは、自律的自己コントロール形成につながります。子どもの思いに共感し、うれしいことも嫌なことも仲間の中で乗り越えさせていきます。

トラブルは相手を知る（他者理解の）チャンスと捉えます。子ども自身で、自分なりの解決方法を見つけて折り合いをつけられるようにしていきます。保育者は揺れる子どもの気持ちに共感し、相手にうまく言えない言葉を代弁し、友達との楽しい遊び経験を通して、友達っていいなの心を育てていきます。

8 保護者支援

「だれもあそんでくれない」「いじわるをされる」「せんせいにいっても、じぶんでやってといわれる」と子どもたちは家でつぶやきます。子どもからこんな話を聞けば、保護者が不安になるのは当然です。そんな時、保護者には次のように説明します。

- ・これは、子どもの心をくぐった上での事実です。子どもにはそのように見えているのです。そんな時こそ、子どもの心を知るチャンスです。子どもの主張は、友達関係が深まってきている証拠です。この時期の保育は、丁寧に言い分を聞いて、相手の気持ちを伝えて、考えて、みんなで納得するということを大切にしています。保護者のみなさんをお願いしたいのは、子どもを信じて「わかったよ。お父さんもお母さんも園には行けないから、お友達や先生に言おうね。きっと言えるから大丈夫」と園に送り出してください。

保護者にできることを示して、園が保護者と手をつなごうとしなければ、子どもは育ちにくい時代です。

第10回 保育者資質向上研修会
平成29年1月18日
会場：焼津公民館 大集会室